

束芋

たばいも  
アーティスト

束芋 「にっぽんの横断歩道」 1999 映像インスタレーション  
撮影：高嶋清俊 ©Tabaimo / Courtesy of Gallery Koyanagi

## 広すぎる世界

@Kyoto

**私**にはブラジル人の親友がいる。2002年のサンパウロ・ビエンナーレで出会ったスタッフの男の子に「僕の彼女が来月、日本に留学するから日本語の先生になってあげて！」と紹介された。

私が帰国してすぐに彼女は京都に移り住み大学に通い始めた。日本語の先生なんてたいそうなことはでき

にできるものではなく、相手に心を開くことのできない個人のなかで大きくなっていくものだ。結局、それを都合よく言い訳に使ってたんだなあと、彼女と話していると痛感させられる。

彼女は、私に彼女を紹介してくれた男の子とは違う男性と日本で知り合い、家族を持った。彼女の娘は私のことを「Tabaimo」と語尾を強めに呼ぶ。この「tabaimo」という言葉をより早い時期に発してもらうために、私は何度も何度も耳で囁いたり、短縮系の「tata」に変えて、ちいさい赤ちゃんに私自身を覚えてもらうため必死になって努力した。もちろんおしめも替えたし、隠れて鼻の穴に指を突っ込もうとするのを何度も阻止した。

サンパウロ・ビエンナーレの会場であって6年経過してもなお、私にとって彼女の存在は増々大きくなるばかりで、それは私が彼女を紹介し、一緒に時間を多く過ごすようになって私の友人たちにも言えるようだ。

この6年の間、彼女以外にも、ブラジル人との出会いが多かった。それは単純に彼女が私にブラジル人の

友人を紹介してくれたということではなく、全く関係のない場所で縁があるのだ。

イギリスに住んでいたときには、ブラジル人5人と共同生活をした。海外で作品を展示したときに出会った作家さんの中でも、ブラジル出身の作家さんとの関係は長く続く。出会った瞬間にどこか深いところで繋がっているような、特別な感覚があるのだ。それはやっぱり彼女と一緒に過ごした時間に理由があるように思う。

そんな彼女が日本を離れることになった。いつかは訪れると理解してはいたが、こんなに離れ難いものになるとは予想もしていなかった。インターネットの普及はこの気持ちを和らげてはくれるが、それも充分ではない。顔を合わせて話し、温かみを感じられる時間は、私にとって最も重要で、制作の原動力にさえなる。それほど友人を持つ私は、とても幸せだと思う。広い世界には、まだまだ素敵な出会いがたくさんあるのかもしれないが、彼女に会うために世界がもっともっと小さくなれば良いと願ってしまう。

なかったが、東京に住んでいた私には、京都を訪れる度に彼女に会い、ときには彼女の下宿に泊まったり、一緒にご飯を食べたりした。そして、出会ったときには想像もできないほど、私たちは深い関係を築いていくことになる。彼女とはお互い、言葉に不自由さを感じていても、いつもどんな話でも盛り上がったし、私はどんなに忙しいときでも彼女との時間を優先させるようになっていった。

言葉の壁、というのは人と人との間